

学校通信 強い網

2015年8/9月号

新版 第75号

編集

駿台甲府高等学校

駿台甲府中学校

駿台甲府小学校

青森から山梨を考える

教育 顧問 酒井 徹哉

大間で見たこと

夏に青森県の北東部、下北半島を旅した。むつ市から、国道二七九号線を北上し海側に出ると、青森のラジオは受信できない。函館の電波が受信できる。宿のTVもNHKは青森と札幌の両方が視られる。

半島最北端の大間は、一五年前NHK朝ドラで一躍有名になった、マグロの街である。大間から対岸の北海道までは、わずか一九キロ。函館までのフェリーが運航されている。新幹線が青森まで開通した今でも、大間の人が東京に向かう最速の手段は、一旦フェリーで北海道に渡り、飛行機で羽田に向かうルートである。大間は地勢的・経済的に函館への依存が強いのである。

その大間に通じる国道沿いに、不思議な建物がいくつも建っていた。一坪ほどの同じ規格のプレハブ小屋、三方に大きな窓、屋根にはなぜか二つの赤色灯、そして中には女性が鎮座し道路を注視している。建物の正面には「工事車両マナーチェック中」の看板。大間には今、町が誘致した原子力発電所が建設されているのである。建設工事で大量の大型トラックが往復する。トラックの安全監視と同時に、雇用拡大も狙っ

た地元対策なのだと解した。

この大間原発を巡って、函館市は国を相手に原発建設停止などを求めた訴訟を起こしている。大間原発から函館市域までは、最短二三キロ、この間は津軽海峡で、遮るものは何もない。函館市中心へも三三キロしかない。事故が起きた際、函館市が被害を蒙る可能性は誰でも想像できる。ところが、函館市は大間原発に対して原発設置の同意手続きの対象になっていない。地元とみなされず、同意権が無いのである。

福島第一原発の事故を受けて、三〇キロ圏までは原子力防災計画策定が義務付けられた。函館市は、少なくとも三〇キロ圏内は地元とみなすべきだと主張している。工藤函館市長は、反原発派でも脱原発派でもないが、自治体の存在権をかけて訴訟に踏み切った。函館市議会は全会一致でこの訴訟を承認した。函館市は本気で、地方自治権と市民の安全を守ろうとしている。

原発の地元同意は範囲がいまいで、他の原発でも同様の問題が起きている。原発事故による放射能汚染は、自然現象と同様の分布をもたらす。そこに、行政区画という、形式的地域を当てはめること自体に無理がある。

新青森駅とリニア新駅

青森の街を巡った。円安のせい、外国

人観光客が非常に多い。新幹線の新青森駅に行くと、1年半前に訪れた時と周辺はほとんど変化していない。空地だらけである。市の中心部から四キロ離れた新駅開業に際して、青森市は既成市街地の分散化・空洞化を恐れ、駅周辺に開発規制をかけた。

新青森駅は、交通の結節地としての機能だけを担うことを目指し、具体的には大型商業施設やオフィスビルを作らせなかったのである。駅構内に商業施設はあるが、一歩駅を出ると、空き区画が広がり、商店や飲食店、ホテルはまったく無い。空地の先には、新たに開発された建売住宅が並んでいる。何とも不釣り合いな光景である。

最近開発規制が緩められ、商店やホテル等の立地を促したが買い手が見つからない。ようやく函館の医療法人が用地を取得し、大規模な病院や薬局が立地するらしい。病院建設は、地域の住民にとって歓迎されることであり、県内はもとより、北海道からの通院も見込まれる。ただ、大病院ができるとホテルは隣接して立地するのを嫌う。この業界ではよく言われている。

青森市は、開発規制は緩めたものの、大型商業施設の出店は認めていない。新幹線の函館延伸で、青森は再び途中駅になってしまう。駅周辺に観光客にとって魅力ある施設や、利便性の高いオフィスがないというのは、ボディブローとなるのではないかと私は危惧している。

山梨では、リニアが時速五〇〇キロで試験運行を始め、体験乗車もできるようになった。開業は二〇二七年と先であるが、リニア甲府駅の場所も具体的に示された。このリニア新駅の周辺をどのように開発するのか、興味深い。

横内前知事は、『人口減少の中、山梨県で

センター二つは成り立たない。このため、商業業務機能は甲府市の中心に引き続き立地し、リニア駅周辺は別の機能、例えば研究所や大学を誘致して、商業業務以外で山梨県の発展を担う土地利用を考えていきたい。』※と述べている。研究所や大学の誘致は私も賛成だ。東京あたりのベンチャー企業や、高所得の企業家向宅地の用地を用意して、地域財政に貢献してもらうのも良いだろう。ただ、商業機能を頑なに拒むと新青森のような事態が待ち受けている。

交通結節機能ということで、空港のような機能を持たせればよい、という意見も多々ある。ただ、これは空港をよく理解していない人の発想である。空港は人だけでなく航空貨物も輸送する。国際線が飛べば、海外に直接製品を輸出できる。流通基地の立地も可能である。しかし、リニアは貨物を運べない。ここに大きな違いがある。

リニア駅周辺に商業施設ができたとして、いまさら中心市街地の商業に大打撃があるとは思えない。むしろ、郊外の既存の大型商業施設との競合のほうが問題になるだろう。現甲府駅が無くなるわけではないので、駅前や中心市街地の生き残り策を考える余地は十分あると思っている。

※「日経グローカル」No.221(2013)より

進路講演会・学年保護者会

3学年主任 上原雅志

今年2回目の3学年進路講演会・学年保護者会は、9月5日、大ホールで行われました。

第一部は、竹内昇氏（駿台予備学校市谷校舎長）による進路講演会。講演内容は、

受験期を迎える高3生の保護者への情報提供とアドバイスです。○センター試験と国立大学の後期試験の変化、英語外部検定試験の活用などの新しい動きが紹介されました。○続いて、Web出願など、来年度入試の最新情報。○それから、保護者向けの大学入試の基礎知識。センター試験の活用方法（私大入試）や、出願校の選び方は重要だと思いました。曰く「目標校を厚めに、最後まで諦めない強い意志を！出願なしには受験なし、受験なしには合格なし」。受験から入学までの費用も紹介されました。

○最後は、受験に際する保護者の役割。8月から10月は現役生のスランプ期、その後大きく伸びるもの。子供が陥る数多くの失敗例が紹介されました。それを承知して保護者は激励し、動揺することなく（親の動揺は子のさらなる動揺を呼ぶ）、弱気は禁物。※竹内氏は現在、駿台の医学部専門校舎の責任者でありながら、ご自身、高3のお子さんをお持ちです。受験指導のエキスパートであると同時に、受験生の保護者でもあり、当日の参加者と同じ立場からのお話には、共感できる点が多く感じられました。

第二部は、学年保護者会。最初に進路指導主任の小笠原理先生から、受験までの手続きや、出願に関する校内の扱いについて、具体的な説明を行いました。過日の学年集会で生徒に話した内容を、同じ資料を使って説明させていただきました。内容は、

○募集要項の入手法 ○推薦入試全般の出願上の注意 ○指定校推薦 ○公募推薦 ○自己推薦・AO入試等々です。

保護者の皆様には、「受験生の宿」の予約についてご協力をお願いします（各旅行会社の案内書は、進路指導室前にあります）。次に、英語科の中村慎介先生から、第一

部の講演でも取り上げられた、英語外部検定試験について、英検・TOEFL・TOEIC・IELTS・TEAPの具体的な内容を説明を致しました。

最後に学年主任がお時間を頂きました。

識者の多くが、「上手に甘えられる子供がよい良い自立を遂げる」ということをおっしゃっていますので、それに関するお話を致しました。【子供に対して、親だけが無条件の愛情を与えることができる。成長の各段階で親から与えられた心地よい経験を通して、子供は自分が人間として大切にされ、尊重されていることを実感する。その経験から、人を大切にすることを学びつつ、独り立ちを果たす。子供は親との、ある種依存的な関係を維持しながら、徐々に距離を広げ自立に至る。親子間の没交渉や一方的な命令、一切の甘えが許されない環境では、子供は人を尊重することの大切さを学べず、自立に至らない。なぜなら、守られているという安心感こそ、人間が未知の経験に挑む（自立）ための条件だから。】受験を通して、子供は自立へのステップを一段階上ります。どうかそのプロセスを良い形で踏ませてあげてください。ベタベタした親子関係というのではなく、大切な話を交し、互いに良い時間を過ごしてください。卒業までの半年は、巣立つ直前の子育ての最後の時間であり、名残の時間でもあります。静かに見守って、親子の良い交流を持ちつつ、子供が安心して学習に打ち込める環境を作ってあげてください。

そんなお話をさせて頂きました。卒業まで、ご家庭と学校との両輪で子供達を支えたいと思います。よろしくお願いします。

「目的」を見定め、「誠実」に取り組むこと。

指導監 石川 博

目的と手段を混同し、本来手段でしかないものを目的と思い込むことを「疎外」という。たとえば、お金は、いろいろなものを買うという目的のために大事なものであり、お金そのものは手段でしかない。お金を積み上げてもお腹いっぱいにならないし、通帳の金額が増えたところで、快適な暮らしができるわけではない。ところが、手段が目的化し、とにかく「お金を稼ぐこと」にあくせくし、その数字に満足したり、不十分だと嘆いたりするのが「疎外状況」である。○がほしいのに、現在お金が足りない、と嘆くのなら理解できる。しかし、具体的な使い道を思い描かず、数字だけにこだわるとしたら、それは不幸だろう。

現在、高校でいくつかのクラスの国語の授業を担当している。宿題の提出率はほぼパーフェクトであるが、詳細に確認すると、人の書いたものを写しているのにすぎない。提出物があり愕然とした。週末課題としているのは文章の要約であり、人の要約を写しても学力の向上に対して何の役にも立たないし、一人ひとりにコメントする教員に対して大いに失礼だと感じる。

ちなみにある数学の教員によれば、そんなことは珍しくなく、中には任意の講習の予習問題ですら、人のものを写して提出する生徒がいるのだという。

宿題を提出する「目的」は何か。言うまでもなく、学力の向上である。それが、ただ提出すること自体が目的となっていると

したら、まさに不幸な「疎外」状況だ。出せばよい、という考えは、捨てなければならぬ。確かに世の中には、形だけ出せばクリアーできる、という奇妙な事態が存在するかもしれない。しかし、学校でそんなことを教え込んではいけない。そして、人が一生懸命取り組んだ成果を写すという行為は、いわば泥棒であり、道徳的に許されない行為だとわかってもらいたい。

このことを生徒に話したところ、翌週には写したと思われる提出物はなくなり、忘れました、と申告する生徒が出てきた。

現在インターネットからいくらでも、写真や文章を拾ってくるができる。安易にそれを使っているのか。その安易さが、某デザイナーのような行為に繋がるのではないか。人の作ったモノを使うときには、一言断るとか対価を支払うとか、「誠実」に対応することが当たり前だ。宿題を忘れたときにどうするか。忘れた、と正直に言うのか、「解答」や友人の成果を写して提出するのか。そんなことに迷わないでほしい。「誠実さ」は学問や社会生活の基本であり、「疎外」を避ける方法でもある。

ご家庭でも、この「誠実さ」と「目的」を忘れないでいただきたい。もう十年以上前になるが、毎週の漢字小テストの一部を新聞記事から出題していたことがある。主な記事くらい、高校生なら読んでほしいという目的だ。あるとき、某保護者曰く「子供が新聞を読む暇がないので、私が出そうな漢字をチェックしています」と。それはおやめになってください、と申し上げたのだが。その「まじめ」な生徒の成績は伸び悩んだ。どこかにある「答え」を手っ取り早く覚えることが勉強だという「疎外状況」から抜けられなかったからであろう。

高校体育祭

体育祭担当 益田 耕治

一昨年、昨年と天候に影響され、雨天時または予定変更の体育祭となっていたが、今年は天候に恵まれ、予定通りの実施となった。今年度から開会式を体育館で実施し、その後、各種目へと移動する形式をとった結果、思ったよりスムーズに進行でき、試合数・時間ともに多くとることができ、非常にレベルの高い試合が数多く見られた。この時期に感じることはあるが、駿高生のパワーは凄まじい。ハンドボール、バスケットボールの会場となった体育館は熱気で満ち溢れ、バレーボールが行われた武道館は、たくさんの方の応援と好プレーで盛り上がり、サッカー会場の補助競技場は、激しい戦いが繰り広げられ非常に競った試合が多かった。最後のクラス対抗リレーでは、クラス一丸となり応援し、大いに盛り上がった。全競技がスムーズに無事に終了できたのは、駿高生のパワーの賜物であろう。今年もやる時は駿高生を見せ付けてくれた体育祭であった。また、短期集中で取り組んでくれた体育祭実行委員と各種会場で審判やタイマーなどを進んで行ってくれた各運動部に感謝したい。運営に積極的に参加してくれる生徒が多い駿高生は素晴らしいと感じた。最後に生徒に大きなケガもなく、先生方・生徒の協力により無事に終了できたことに感謝し、体育祭の報告といたします。

◇各競技結果(各学年1位のみ掲載)

【男子ハンド】

1年A組 2年A組 3年D組

【男子サッカー】

【男子バレー】
1年F組 2年D組 3年E組

【女子バレー】
1年A組 2年A組 3年A組

【女子バスケット】
1年D組 2年F組 3年C組

【女子リレー】
1年E組 2年E組 3年D組

【男子リレー】
1年A組 2年A組 3年A組

◇総合結果(各学年1位から3位まで)

【1学年】

優勝 A組

準優勝 E組

3位 B組

【2学年】

優勝 A組

準優勝 D組

準優勝 F組

【3学年】

優勝 A組

準優勝 E組

3位 B組



第22回 駿中体育祭

体育祭担当 武川 公貴

8月25日の始業式後、体育祭の色別結団式が行われました。抽選によって各クラスの所属する色が左記のように決まり、色ごとに団長・副団長が選出されました。

白組 3D・2A・1C
赤組 3C・2C・1B
黄組 3B・2B・1A
青組 3A・2D・1D



結団式で士気を高めた後は、いよいよ全体練習の始まりです。放課後の練習はいつ雨が降ってくるかとハラハラの連続でしたが、何とかほぼ予定通り実施することができました。全体練習では種目ごと

に入場から退場までの流れの確認を行いました。その後は色別に分かれての活動を行いました。大なわ跳び、騎馬戦、ムカデ競走、色別リレーなどのチームワークや作戦が必要とされる競技について、3年生を中心に指導しての練習が行われました。学年の壁を越えてチームを結成し、3年生が1年生を指導したり、励ましたりする姿が見られ、一日一日各組の結束が強くなっていく様子がわかりました。

特にムカデ競走では、3年生を中心とした本番さながらの熱い応援の中、何度も何

度も転びながら練習を重ねていました。3年生にとつては最後の体育祭です。後輩達は3年生のそんな姿を見て熱い気持ちを受け取っていたと思います。

9月5日の

体育祭当日は秋

晴れにも恵まれ、絶好のコンディションとなりました。各色とも3年生を中心に一致団結し、チームの為に全力でプレーする姿が見られました。もちろん、勝利の喜びもあれば、失敗した悔しさもあります。3年生の中には思わず涙ぐむ生徒も多くいましたが、その涙はみんな一生懸命頑張ってきた証です。生徒たちの心の中にはきっと多くのものが残ったと思います。

最後に、人工芝グラウンドで初めての体育祭開催でしたが、練習期間中を含め怪我をした生徒数は例年の四分の一まで



激減しました。保護者の皆様には、観覧席の野球場への移設や撮影エリアの設置など、新たな試みにご協力をいただき、ありがとうございます。次年度も熱い応援をよろしくお願いいたします。



緑陰教室便り

中学校副校長 山下・保坂

本校では開校以来、夏季休業期間に学習合宿を行ってきました。現在は一・二学年の全生徒を対象に、男女別に男子は軽井沢、女子は清里で実施されています。これは、避暑地にある駿台グループの施設を利用し、無言学習を中心に学習集中力を養うことや、集団生活における規律やマナーを学ぶことを目的に行なわれているものです。

今年は2年生が先発し、二泊三日の合宿の後わりに、1年生と入れ替わる形で行われました。軽井沢では、2年生は代々、合宿所から歩いて行ける離山（はなれやま）に登る「息抜き」が2日目の午前中に予定されています。本来は午後に出向きたいところですが、この時期の軽井沢は夕立が多く、昨年から午前中に変更しました。登山は一人の脱落者もなく「さすが」と思いましたが、その後の学習で集中力を欠く姿が散見され、体力不足という課題がうかがえました。大学入試に向けた受験勉強には計り知れない体力が必要です。山を一つ登ったくらいで学習がぐだぐだになるようでは、高みにはたどりつけません。平素から意識を持って体力作りに励みましょう。



1年生は塩沢湖への遠

足が唯一の息抜きでしたが、雨にたたられました。無言学習には慣れていない印象で、途中に小テストなども入れましたが、自分で目標を定めて学習を進めてゆくのはまだまだ苦手かなと思いました。

女子の清里

高原ロッジは、学習は学習室に集まって行いますが、班ごとにコテージに泊まるため、コテージで過ごす時間が生徒の楽しみになっています。2年生は二日目のサ



ンメドウズへの散策が雷雨のため見送られ、これにがつくりきたのか、その後の無言学習に集中力を欠きました。さすがに一日中学習というのはきつかったようですが、三日目の午前中の学習は、切り替えてしつかりできたことは成果でした。2年生と入れ替わりに入った1年生は人数が少ないこともあり、まとまって行動できました。二日目の木工体験では一人ひとりが個性を発揮したオルゴールをつくり、そのオルゴールを無言学習の時間もバスの中でも大事そうに持っていたのが印象的でした。無言学習も最後までよく頑張りました。

無言学習は集中力が切れかかったとき、眠くなったときが勝負です。自分を励まし、そこを乗り越える努力を積み重ねることを、それが集中力を養うことにつながることを早く実感してほしいと思います。

第1回 SUNDAY ENGLISH CAMP

小学校グローバル推進主任 菊地雅美

駿台小・中・高の英語科では、今まで以上にグローバル教育を推進する運びとなり、小学校では、児童の英語への興味関心を高め、異文化体験をするための新たな取り組みとして、6年生の希望者を対象に、夏休み期間中に駿台清里高原ロッジにて、英語キャンプ「SUNDAY ENGLISH CAMP」を開催することになりました。そして、第1回目となる今年度、7月28日、30日の2泊3日のプログラムに37名の6年生が集まりました。

英語キャンプは、アメリカンカウンセラー（AC）が中心となり、英語活動（英語の自己紹介・劇・歌など）や異文化体験（ダンスパーティー・キャンプファイヤーなど）を行います。ACは、このプログラムのために全米各地で厳しい選考を経て、事前にトレーニングを行い、日本へ招致される大学生および高校生です。カリキュラムをもとに、キャンプ参加者が常に英語を聞き・話す環境を実現し、活動をリードする役目を担います。ACとの交流によって、キャンプ参加者は英語や文化の大切さを学ぶことができます。

また、ACと協力しながら、キャンプ参加者の英語活動をサポートするジャパニーズカウンセラー（JC）もいます。キャンプ期間中は、英語活動のサポートだけでなく、キャンプ参加者が円滑に生活を送れるように、スケジュールや健康面でのサポートも行ってくれました。

今年度、キャンプ参加者は、4〜5人のグループに分けられ、各グループに配属さ

れるACやJCと共に、3日間、朝起きてから夜寝るまで、全て英語の生活に挑戦しました。1日目、「WELCOME!」と書かれた旗を掲げながら、歌を歌ったり、アーチをつくったりしながら迎え入れてくれたACのハイテンションに、少し戸惑い緊張気味だった子どもたち。しかし、ACと一緒に食事をしたり、ACの自己紹介に習って自分の自己紹介文を作り、発表練習をしたり、グループで自作の英語劇を考えて練習に励むうちに、だんだんと笑顔がふれ、積極的にACとコミュニケーションをとるようになりました。完璧な英文はわからなくても、知っている単語や表現、ジェスチャーをつかって「なんとかACに伝えよう」「ACと話したい」という子どもたちの意気込みが、英語活動を盛り上げていました。ダンスパーティーやアメリカンカーニバル、キャンプファイヤーといった、日本ではあまり馴染みのない活動も、親しくなったACと共によく歌い、よく踊り、よく話し、大いに楽しむことができました。

最終日の自己紹介文や英語劇の発表では3日間の練習の成果を発揮しました。修了式で、一人ひとりにキャンプ修了証書が手渡されると、英語づけの生活に挑戦し、ACと仲良く関わった達成感に満ちた、いい表情が並んでいました。

